



茶臼集

下



一茶發句集下

秋之部

秋まや隅の小隅の小松鳴

狗子有佛生

鳴るぬと去るぬ物う伝う那

りまゝ海のさゝやまあみり〜を我

聲しをふいて披衣をきん稲の音

ぬまの成衣をかろす振う那

子守り 燈棚のこもを 燈のまぶ

病中

うつろや 障子の宿は 天の川

本宿山へ 流るる せうり せうり 川

こゝろ せうり せうり せうり して

鳥をて けいふり せうり せうり せうり

末のまや せうり せうり せうり せうり 持

亡妻新盆

うらみ子や 母の せうり せうり せうり せうり

玉極や 上坐 せうり せうり せうり せうり

魂送

おとろ せうり せうり せうり せうり せうり

精気の まぶら せうり せうり せうり せうり

山甲や あまの せうり せうり せうり せうり

るつろり せうり せうり せうり せうり せうり

せうり せうり せうり せうり せうり せうり

せうり せうり せうり せうり せうり せうり

せうり せうり せうり せうり せうり せうり

稲妻やうらうらと響く

神楽

秋風や州も角力とる男山

言井野のさきま上り

燐火や磁石ふあてる古の

病後

かま釘のやうぬきと秋の風

ささ女三十五日

秋風やむらさき紅い赤い

秋風の吹けと極ぬ小松哉

墨條の膝うまのわらう鳩の

正見寺の上人十とりの影後夜を

あゝと遷任ありし夜を

秋風やちひさの秋はあまうと

五十と

あゝとちひさの秋はあまうと

あゝとちひさの秋はあまうと

あゝとちひさの秋はあまうと

愛あつても地獄の種をまかすも
あつても浄土をまりのけりて
生かすも生かすもや料の露
男女私あちきりておもしろや

遊りてを教訓し

人間は愛と苦しみよ命と

愛をまかす

愛の世と愛の世ありて去りて
あつてもやむらひ世を因りて

あつてもやむらひ世を因りて
あつてもやむらひ世を因りて
あつてもやむらひ世を因りて
あつてもやむらひ世を因りて

経堂

虫の尾を指し〜
あつてもやむらひ世を因りて
あつてもやむらひ世を因りて
あつてもやむらひ世を因りて
あつてもやむらひ世を因りて

水あふあいの世を乃とんあて

二百十日

世の中いふよきとふらう〜村のあ
は月世をあはれと乃とんあ

うとんあ

甘のあをせはと〜建障りしよあ
新あや人のあをさううあ
朝あの上り〜と〜や 径山寺
あ〜とあつあ〜と〜とまりのあ

兔灯を孫の少猫よ〜と〜

萩寺

あのを信あ筆をあや萩のあ
あの子珠あうけ〜ああり村のあ
入あのをああありまのあ花
きり〜ああんと〜と〜と〜 萩萩
あ〜とああを〜と〜と〜 萩うあ
は戸川やああああ乃とんあ
あああやああああ〜と〜とあ全

明月の光鏡の通りくろく影

病中

明月やとらりちを無むつしき

明月の光ととらりちを無むつしき

右 六十二章

希杖 校 楚江

明月をみくろくれろとほ子哉

嬉 持山

明月の光ととらりちを無むつしき

赤く笑

明月や解きも平とあのり出

筑 平川舟留

明月やほい指先の名あふ

るる海しりしむあふとらりち

明月の光ととらりちを無むつしき

妹 持山とらりちを無むつしき

明月の光ととらりちを無むつしき

月蝕

人皇も月より先へ缺みたり
あまの御孫も穂ふらりさのこ三日は月
涼川や堀を流るるの秋は月

春耕 孫祝

門の月まはるる男のつとみ終
聖子の秋は月を待たふ幕は
照くはく月うさひあり 隔田川
秋の原知くくあんとうくき

秋日和とも思ふもあはれ
あはれはまのつとみくや妹日和
母のあまのこは遠ひあはれ
まはるるのやあはれはくは秋のま

病後

急い處つと活る所は秋のくれ
中くく人と生れく 妹はるる

八月二十九日 菩提寺詣

本堂の程も長途なり 舊田友

○
あられなきは月二十の日候と
あつてはあつてはあつてはあつては
三十年の始り候者あつて
おのき被知ふとあつてはあつては
編のもの等ひく知ひのいそ
むりききいへ建たりあつては
きのい集りいんあつてはあつては
いんあつてはあつてはあつては
あつてはあつてはあつてはあつては

道程屋いりあつてはあつては
はあつてはあつてはあつては
あつてはあつてはあつてはあつては
あつてはあつてはあつてはあつては

○
あつてはあつてはあつてはあつては
あつてはあつてはあつてはあつては
あつてはあつてはあつてはあつては
あつてはあつてはあつてはあつては

美僧の寂面

影法師の如く寂の心

松

一人と松面は清く寂をうけ
草の如くも若く代を以て少くも

豊秋

二軒の家や二軒併はく秋の音

外う漢

うらうら日本のはるそらくも

松のありき

厚のやあをれ今年も月見
白川やありき天の厚
田の厚や里のくも感
おち清くとあふ清く水田の厚
天の厚おちくおちくおちく
秋夕や峯の山をの門
立の今もそそぬ夕
昔のそそくもほく高よ入

惟も入宮をりつそよ 純古節
多花自花 兼花むつしや
あそびや 深ふの舞も 色好お
屋さ〜もや 花の意路不速ふふ
人あつと名を種 存也 田舎の屋
弟教り 花あ〜り〜あんき
わ〜る〜と〜あ〜園の〜人
〜や 浦〜う〜ん

日本のあう 深まて 花穂成

花人の垣根ふさ〜む 花穂成
花穂もあれふらと か〜り〜り
人からと 花あ 花あ〜あ〜あ〜り
花穂もや 細さ〜ら 花さ〜ら〜さ
宮ふ正風院 花あふ 百花あり
門あ 花あ 花あ 花あ〜通〜と
大花あ 今〜も 花あ〜り〜り
花〜の 菊 大花あ 花あ〜り〜り
まげ 花あ 花あ〜り〜り 花あ〜り〜り

店の月

月の光と〜まきまき〜うね
名所紅葉

夕櫻も同〜流れや立田川
柳の影のまゆ柳よみさるうね
ちちほ片戸と〜うり夕紅葉

毒茸

くさ〜茸と〜き
茸持のう〜る〜強うね

戸隠山

初梨の天〜霞〜社きんか
柿のま〜あ〜と〜小僧
小僧籠

指をぬ栗の〜よ大
風を捲りの〜ら
を〜く又門ふ捲く影合の
も〜ん〜ん〜ん
西佛の鬼のぬふ阿そ〜ひ

あつちのあつちのあつち

象味の松梅へ遠は風より柳

あつちのあつちのあつち

あつち

山のあつちのあつちのあつち

秋のあつちのあつちのあつち

春のあつちのあつちのあつち

あつちのあつちのあつち

九月

あつちのあつちのあつち

右

六十四章

雲士

掬斗 校

冬之部

か何志くく輝きまされ初志くれ
あつ輝の身なきあつあり初時
初時自夕阪紫ふおくりり
目さけ靨を鶯良よまの志くれ

旅

あつくくや家あ〜あつ初志くれ

業名

懐めつひおろりや夕〜くれ

途中きく素玩ふ遊ふ

志くれ込め角り〜二軒目乃菴
秋志くれや〜峰され〜ちんま坊
くのお志くれ〜地まは佛〜り

悼

鳴鳥あんふ志くれのあ〜ん〜
遊人あつ古ふ隠ま〜結
られ〜

業のなる民を巡るやむし時白
葉木富を通しきくまると十歌分
ゆりゆりの思おも月夜十夜分
考りゆりひより神の由立けを

桃青靈社

由立の初ふうけ集る初しき
そせは流るやとよまめて極風
義仲寺へ急を能初志をれ
そせは流るやとよくし流のゆきを

そせは流るふれいそまは流極
ゆき流る極を解とよまあし

春日山

そせは流るやとよしそあると
そあまて生居るゆりのうそあれ流

橋上乞食

ゆき流るやとよしそあると

追分

ゆき流るやとよしそあると

栗柿や新吉原も小敷並

一人松

次の月夜灯で寝あつくさくは
と〜〜〜〜〜
おせの柿お燗牛のかく家
かり〜愛のひはまのむきひは
よきのみお〜り住佳〜
く〜あせ〜つ〜あや〜舞の
それあつお柿〜そ〜あ〜あ〜

さ〜〜〜〜〜
栗〜お〜秋〜あ〜増〜
ち〜あ〜し〜菜の屋〜あ〜
この菊並り〜る雪の片福
あ〜〜と〜ぬ〜必〜あ〜
妻を〜〜餅〜あ〜あ〜
料あ〜ん〜壁〜七福神あ
あ〜〜あ〜〜あ〜
あ〜〜あ〜大根浮連〜あ

この世に引かへて回縁を結ぶに
善神おとすもいふもあつた
横さぬにらげりて
まらりとも任果んあつた
えゆも今もあつた
そまらん山平や
かへんす
撫ふんか
結ふんか

おのり

男少孫や前のもちり
ふに六年三月十日

賀田家大川氏

本格や子代お八も代
あつたや
も仙や
水仙や
磯崎村と名

抄中集一と日向小群一少信う那
首集一と云月ころの地根は

花鈿委地無人收

思ひ種思もぬ種一も枯ゆり
枯せ思縁々兔あ何一ととと
女も思あんの周果七枯うの
大根引一太根く是とあ入り
種もあも粗思ふり大根引
鳴雀丘大根も今引一を

か開やあつ〜く通り表の白
新修ふさあ〜く岩のさらん
分〜ゆる構もあきぬあ〜り
岩のゆる岸の粗根通ひり
岩のあよ月あ鳥鳴あ〜り
構のあよ〜らむけ〜り
構の中や目あな代の表と表
取〜あ〜も家と種〜あ〜り

松

碓氷山

もや〜と後冬〜の細〜のや

飯菴

当〜れもそれありあり〜冬籠

小人閑居成不善

冬籠 悪〜の雪のほのり〜

〜種〜柳のほを〜籠

眠り極〜ふ習ん〜のや

西のやと〜る〜のむや〜籠

ちせ後塚先おむまのたの孫子
加〜の〜る〜紙〜と〜る〜

大坂ハ新象

あ〜の〜る〜ゆと〜る〜み〜ん〜

緒成り〜る〜ん〜引〜る〜知〜ひ〜

今が序を〜笑〜建〜る〜ん〜う〜

海とのら〜れ〜る〜〜とのふ〜象〜

三日月と序を〜あ〜る〜細代書

細代書〜る〜る〜と〜る〜ん〜く〜

細代も馬を急ぐと楯をよこす
 ともひのこはたかちのひまき海に
 くれれと海を埋め甘満ちを
 ゆりこい浪をうらたぬさき
 若くともりもるこもろくも
 こそくちりたか

象つこのか^カを扱く鳴るも
 此地の花と日自あくく
 扱あつこもあつと搦てんる小野

海も福を待てよ 浮舟を
 うそくちりあつちのひまき
 戦をかくく母の叔父の那
 門下子もあつちのひまきの鐘
 一さんちとんてあつちのひまき
 盛任り志也の西きくく
 初巻や信の上九少り焼
 ちの巻や今の里の足く焼
 初巻やこもあつちのひまき 左佛

初智や多も構りぬ妙し

あまの伝説のこころせら

雲ちりやまのハハえぬ傳象札

くくくさきはくあり門の香

ちちぬ僕や後の香をたぐ

あまのこころあまのこころ

あちやくとあまのこころ

たよりよげとらぬり雲のさ

雲ちりや振うととととと

十二月廿四日古郷入

さうまの終の極う雲五尺

一葉痛中のていめ

経ありおぬちや花と

極や片人つとととと

聖ハ又とこの月秋の里邦系

り人を四てまのくや

齋けやひ世帯の想軒

出始を祝めとととと

一 観音の御守りありては佛
堂の御佛さても出なむとありよ
此の御守りありては佛の御
堂の御佛さても出なむとありよ
とめかたもあつて任せぬとこれ
節の御守りありては佛の御
堂の御佛さても出なむとありよ
念と相續

節分

福をやくと梅干や薬の御守り
餅の御守りありては佛の御
堂の御佛さても出なむとありよ
節の御守りありては佛の御
堂の御佛さても出なむとありよ
長崎
君の御守りありては佛の御
堂の御佛さても出なむとありよ

雜

おのつらうちうりちあり新路山
掃へぬへ露のりりたま利路の備
作家や四十九年のむらあぢ
露のよれふ代も一日あゝなりぬ
佛ともあゝくうりくをの松
牧人七十矣
きゝまへ佛の露もあゝと

琵琶湖

る漣とりのつらつらとを写すのふ

天下泰平

おのつらふ病き管ふらり余州外

右百六章

文虎校
春甫

新葉ははらけはるかに
しづかにのびそまじりて
世の中をかくるるを
まらんとくちうの
かきうは梅を思ふ
あはれ
古昔ふりて任人のあはれ
るるはあはれ
かきうは梅を思ふ

例ははらけはるかに
しづかにのびそまじりて
世の中をかくるるを
まらんとくちうの
かきうは梅を思ふ
あはれ
功成身退の
あはれははらけはるかに
しづかにのびそまじりて
世の中をかくるるを
まらんとくちうの
かきうは梅を思ふ
あはれ
七々の人

竹葉のひらひらとあけしむらん

念彼観音力

稲の穂よ南無稲の穂よ
かゝるものなりは 秋をあじぬ
けをみの 穂うらむをけるまきん
うきをば 舟のちもさるれらな
木乃あらし 雲のたふさるる
さつさふらゝる 海をぬりぬ
とちのちちのちのちのちのち

花のよみかき入せむらゝの母も

らゝるはあけむらゝのちむら

りあはるるあはるるのち

ちのちのちのちのち

ありゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

笑を幾ちむのちあれ

長ねのちゝゝゝゝゝゝゝゝ

おのちと西へあはれちのち

月をさし置くかぎり花枝をまひねる苦無
表裏はゆるむ車輪の輪はゆるむといふ
しるのく乃こそそよ風をむしあれお師の
能く此を曉し生涯を自然に任せし
きしにいぬるふぬて夜の冬はまうし
まじのちせぬて後し人くまをこ境
はてしなくあつてかきつてかきつてか
らりかきつてかきつてかきつてか
いふおのゝこもななくそのこく何者の

ワタシもやどに批のちかひにはいふね
いふおのゝこもななくそのこく何者の
風の荒れをいふもななくおのゝこも
らふ瀟々たる秋のちかひやひさしれん
あれそよふといふおのゝこもななく
おのゝこもななくおのゝこもななく
同一のちかひにわかれしちかひにわかれ
おのゝこもななくおのゝこもななく
未だおのゝこもななくおのゝこもななく

う市の星見えあふれんをゆく所の
時の日記やあるもの價もよく紙を求
むとせば、何と愛ひろひ事々この
あふの巻となくはあうたうとみや
ふとくまや

文政十のちり二とをとりしもの

徳和寺のゆ弥 某 志

明治卅五年十一月 購版

明治卅六年六月廿五日發行

一茶句集奥附

正價金貳拾五錢

發行者 大橋新太郎

東京市日本橋區本町三丁目八番地

印刷者 水谷景長

東京市小石川區久堅町百〇八番地

發兌元 博文館

東京市日本橋區本町三丁目八番地

佳客期
新書校
未校須
集